江戸時代の渋沢栄一
（少年期～青年期）

※「父の名代」関連資料

渋沢栄一の生地（深谷市血洗島）

明治時代に建てられた家屋

家屋の様子（室内）

正門より望む

渋沢栄一は深谷が生んだ偉人で「資本主義の父」と呼ばれた大実業家です。渋沢栄一は多くの銀行や会社の設立に関わり、日本の経済産業を発展させました。彼が創立や運営に関わった企業は約五〇〇にも及びます。

そんな栄一ですが、生まれつきの実業家ではありません。栄一は一八四〇（天保十一）年、現在の深谷市血洗島の農家に生まれました。栄一の家は、農作、養蚕、藍玉の製造に携わっていました。その時代は「士農工商」という身分制度があり、武士が権力をもっていました。

栄一が十七歳の時でした。代官に呼び出された父に代わって出頭した栄一は、横柄な態度の代官に五〇〇両の献金を要求されました。「自分は代理なので家に帰って父と相談します。」と言うと代官は腹を立てて、栄一に暴言をあびせたのです。この一件で、栄一は「今の幕府が悪いから、こんな無理が通るのだ」と痛感しました。武力で幕府を倒そうと考え、同志を募り、高崎城乗っ取りを計画しますが、計画はやむなく中止となりました。

少年期から青年期にかけての出来事で、栄一の今後を予見させるエピソードです。

商業に力を入れた渋沢栄一

※「大隈重信からの誘い」関連資料

第一国立銀行　［渋沢史料館所蔵］

栄一は二十七歳の時、ヨーロッパ諸国を見てまわり、商業の発達こそ国の発展に必要だと学びました。そして、個人の利益を追い求めるだけではなく、国の発展のために国を富ませなければならないと考えるようになりました。

ヨーロッパから戻った栄一は、静岡藩に「商法会所」という現在の株式会社のもとになるような会社を設立しました。しかし、大隈重信から国の発展のために力を尽くそうと誘われ、銀行設立、貨幣制度など、様々な改革に着手していきました。

三十四歳になると、栄一は大蔵省を辞めました。その時、友人は「君はこのままつとめていれば大臣にもなれる。商人になろうとは金に目がくらんだのか。」と栄一を責めたと言われています。商業が低く見られていたことが良くわかりますが、栄一はこれに対して、「金銭を扱う仕事をいやしむようでは国家は成り立たない。人間のつとめるべき尊い仕事はいたるところにある。官僚だけが尊いわけではないぞ。」と反論しました。この時、栄一は「実業の力で国を発展させる。」と決心したのです。

志高く生きる

※「その道に向かって」関連資料

第一国立銀行　［渋沢史料館所蔵］

渋沢栄一 生地（深谷市血洗島）

徳川昭武とともにヨーロッパ訪問
［渋沢史料館所蔵］

いずれもフランスで撮影
［渋沢史料館所蔵］

渋沢栄一は十七歳のときに、その後の人生に関わる大きな志を立てました。それは、「武士になりたい」というものでした。そして、武士になると同時に、「当時の政体をどうにか動かすことはできないものであろうか・・国政に参加してみたい」という大望をも抱くようになりました。しかしその初志は、新しい明治時代の幕開けにより、生涯を貫き通すものではなくなりました。

明治四、五年頃、明治政府の役人として数々の施策を進めていく中で、栄一は「実業界で身を立てる」という新たな志を抱くことになります。そして、明治六年、官吏としてではなく実業家として国を豊かにしようという志を立てて、大蔵省を去りました。その後、栄一は一生をかけて実業家としてさまざまな重要産業に関わり、日本の経済成長に貢献しました。栄一の信念は自分だけが金儲けをしようとするのではなく、「論語」の精神である「道徳」と「経済」を融合させることが日本の発展には必要だというものでした。

後の三菱財閥を創った実業家、岩崎弥太郎から「君と僕で手を握って事業を経営して、日本の実業界を思いのままに動かしていこう。」と言われ、それに対し、栄一は「富は独占するべきものではない」と主張した

渋沢栄一のことば　※「渋沢栄一訓言集」

「立志とは、一生を有意味に終わるようあらかじめ志を決定することである。」

○将来を見すえたこころざしをもとう

「およそ目的には、理想が伴なわねばならない。その理想を実現するのが人の務めである。」

○理想の実現に向けて、目標・目的を掲げよう

「できるだけ多くの人に、できるだけ多くの幸福を与えるように行動するのが、吾人の義務である。」　※吾人…わたしたち

○周りの人が喜ぶことは何か考えて行動しよう

「處世の大道」より

「ただ、衷心より道を楽しむ者のみがいかなる苦痛をも苦痛とせず、いかなる困難をも忍び、敢然として道を進み、道を実行してもゆけるのである」

（ただそれを知っただけでは上手くいかない　好きになればその道に向かって進む　もしそれを心から楽しむことが出来れば　いかなる困難にもくじけることなく進むことができるのだ）

エピソードがあります。栄一は、自分の利益のみを追求するのではなく国民全体の「富」を考え、その信念を貫き通したのです。

○『立志』（渋沢栄一『青淵百話』より）

「人間の一生涯に歩むべき道、その大方針を決定することが立志というものです。自分が世の中にあって、どんな方面に向かってよいか、どんな仕事をしたらよいのか、どのようにして生涯を有意味に送ったらよいのかをあらかじめ決定するのですから、なかなか重大な問題です。」

○『志の立て方』（渋沢栄一『青淵百話』より）

「われわれ凡人は志を立てるにあたって、とかく迷いやすいものです。社会の風潮に動かされ周囲の事情に押され、自分の得意でもない方面へと向かってしまう者がたくさんおります。…志をもつための工夫としてまず冷静になり、自分の長所と短所を比較し得意とするところに向かって志を決めるのがよいでしょう。そして、根幹となる大きな志が立ったならば、今度はその枝葉となる小さな志について日々工夫することが必要です。小さな志は変わっていくものですが、大きな志からそれてはなりません。」

社会への貢献

※「自分を変えたもの」関連資料

「青い目の人形」を抱く渋沢栄一（昭和2年）［渋沢史料館所蔵］

「日本資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一は、明治期に入り、新しい日本をつくるために力を尽くしました。栄一が生涯にわたって設立したり後援したりした企業（会社等）は五〇〇社以上になります。その分野も金融、鉄道、運輸、紡績、製紙、土木・建築、電気、ガス、倉庫、流通など多岐にわたり、そのほとんどが大企業へと発展し今日に至っています。「経済活動は常に道徳にかなったものでなければならない」と説き、日本の社会が、そして国民すべてが豊かになる経済の仕組みを取り入れようとしたのです。したがって、社会全体の利益（公益）を目指し、自分が設立した企業（会社等）の経営が軌道に乗れば人に任せ、自分は別の企業（会社等）を立ち上げるということを繰り返しました。

こうした経済活動に加えて、栄一は社会福祉や教育、国際親善・民間交流の分野を中心に、社会的な貢献に努めました。栄一は経済活動で得た富は、独り占めにせず、社会に還元すべきだと考えていたのです。栄一が関与した社会事業とその他非営利事業は六〇〇前後あったと言われています。民間人の立場から、常に「社会のために」という公益の精神を貫き通したのです。

中でも、東京府（市）養育院については、栄一は初

関東大震災後の復興支援を行う栄一

［個人所蔵］

栄一が長年に渡り関わった養育院

［渋沢史料館所蔵］

日米の親善に努める栄一（訪米4回）

［渋沢史料館所蔵］

渋沢栄一　書［深谷商業高等学校所蔵］

代院長を六十年ほど（亡くなるまで）務め、貧困者の救済や療養、感化を要する幼少年の支援、身寄りのない子供の育成等に力を注ぎ、日本の福祉活動の基盤を築きました。また、時代の風潮として商業が軽視される状況にあって、商法講習所（後の一橋大学）の運営にも関わり、商業教育の充実・発展に尽力しました。富国のために、商業教育により優れた人材を育成したいという思いがあったに違いありません。そして、栄一は、商業教育と同様に国が力を入れなかった女子教育についても貢献し、東京女学館の館長や日本女子大学校の校長も務めるなど、広く私立学校の運営にも力を貸しました。

日露戦争に勝利し、日本の経済力が高まる中、国際関係の調整には政府だけでなく、民間交流を進める必要性が高まってきました。栄一は、国家間の問題も「忠恕の心」が大本になければならないと考え、この民間交流の担い手としても活躍します。第一次世界大戦後国際連盟が発足した後、日本国際連盟協会が設立されると、栄一は八十歳を超えていましたが、「生のあらん限り尽力いたしき決心なり」と、会長職を承諾しました。また、日米関係の改善には、四回渡米して両国経済人の相互理解に努めたり、日米親善の輪を子どもたちに広げる人形の交換を進めたりしました。

至誠の人　尾高　惇忠

※「小さな一歩」関連資料

尾高家（昭和初期）［八基村写真帖より］※部屋内部［渋沢史料館所蔵］

富岡製糸場の場長室に、尾高惇忠自筆の「至誠如神」の書が掲げられています。「どんなに小さなことでも誠意を尽くすことが大切である」という意味を表しています。初代富岡製糸場長として力を尽くした惇忠の誠意ある姿をうかがうことができます。

富岡製糸場は、一八七二（明治五）年に完成した日本で最初の官営製糸場です。当時、政府の役人（民部省租税正）であった渋沢栄一が、この製糸場の建設計画を中心になって進めます。後に初代総理大臣となる伊藤博文らとともに、フランスの指導者を招き、模範となる工場を設立し製糸技術を全国に広げ、生糸の輸出振興を図ろうとしました。その後、栄一は大製糸場の建設及び経営の責任者として、人望があり養蚕のことにも精通している惇忠を推薦します。惇忠は、栄一の思いを真摯に受け止め、「まさに、それこそ私が適任だ、生涯の仕事としてあたろう。」と応え、政府の威信をかけた大事業の責任者を引き受けることとなりました。

一八七一（明治四）年三月、工場建設が本格的に開始されますが、木骨煉瓦造りの大建築、前代未聞の工事となりました。大変な苦労があったにもかかわらず、惇忠の情熱と使命感は少しも揺るぐことはありません

富岡製糸場 工女勉強之図
［富岡市立美術博物館所蔵］

尾高惇忠
［渋沢栄一記念館所蔵］

尾高勇
［個人所蔵］

現在の富岡製糸場

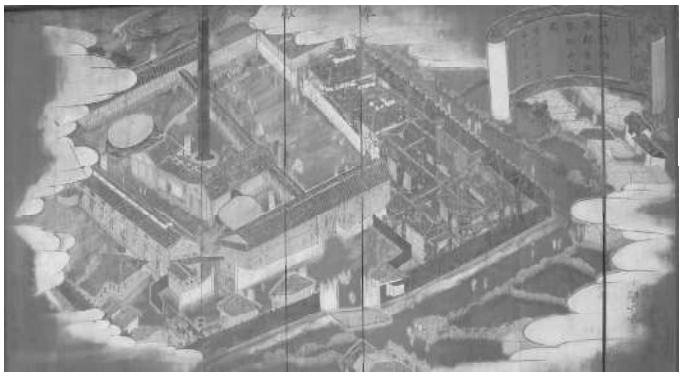
でした。木材調達にあっては、「神木を搬出するわけにはいかない」と反対する地元民に、誠意をもって対応しました。また、初めての煉瓦造りにあっては、郷里の韮塚直次郎に依頼し、深谷の瓦製造の技術をもって試作させ、見事、焼成に成功しました。一方で、「外国人に生き血を吸われる」というわさ話のため、工女が集まらない困難に遭遇しても、惇忠は長女勇（当時十四歳）を「工女第一号」として採用しました。その誤解を解くために自分の身をもって行動した惇忠の努力が実り、全国各地から工女が集まり始め、一八七二（明治五）年十月、無事操業を迎えることになりました。

惇忠は初代製糸場長として、日本の製糸技術の師範となるよう工女の資質の向上に努めました。また、本務の技術習得のほかに、習字や裁縫、読書などの教室を開き、一般教養の向上も図りました。そして、工女のほとんどが十代の若い女子であったため、規律の維持や道徳心の育成にも力を注ぎました。

松代出身の工女たちが富岡を去るときに、惇忠は「繰婦は兵隊に勝る」という言葉を贈りました。製糸をもって国を支えるという惇忠の信念が伝わります。工女たちはその言葉を心の支えとし、誇り高き仕事であるとの自負心を抱いたことでしょう。

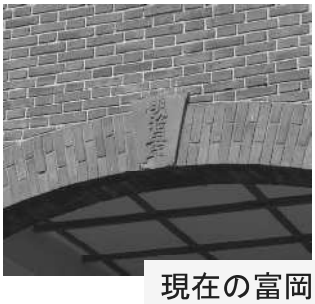
深谷の煉瓦物語

※「深谷の煉瓦は国の宝」関連資料



韮塚直次郎が奉納した額（明治13年）
［深谷市永明稲荷神社奉賛会所蔵］

韮塚直次郎
［個人所蔵］



現在の富岡製糸場　※1872（明治５）年7月完成

一八七〇（明治三）年、韮塚直次郎は、富岡製糸場の建設において、建築責任者の尾高惇忠から資材調達のまとめ役を命じられました。直次郎は、その期待に応えるため娘夫妻に実家を任せて富岡に移り住みます。

富岡製糸場はフランス人技師による設計のため、その建築には数十万個以上といわれる莫大な量の煉瓦が必要になりました。しかも、当時の日本ではその製造方法すら分かりません。惇忠は、渋沢栄一と相談のうえ、瓦製造の技術に着目し、直次郎に煉瓦の製造を託します。直次郎は直ちに、地元深谷や富岡近在の瓦職人を束ね、煉瓦の素材や性質を聞き、材料である粘土を探します。そして、富岡近郊の笹森稲荷神社（現甘楽町福島）付近で煉瓦に適した粘土を発見し、その周辺に焼成窯を設け製造にたどりつくことができました。

しかし、瓦職人の技術をもってしても、試作は失敗の連続でした。それでも、配合比率を変えたり、焼成温度を変えたりするなど、試行錯誤を重ね、ついにフランス人技師が持参した見本を上回る良質の煉瓦を焼成することに成功しました。直次郎は、窯の周りを跳び回り、「天にも昇るような気持ちだった」と、惇忠に語ったと言います。製糸場建築の主体となる煉瓦の

創業当初の煉瓦工場［深谷市所蔵］

粘土の採掘　［深谷市所蔵］

平成18年まで操業した煉瓦工場

東京駅をモデルとした深谷駅

製造に誠心誠意尽くした直次郎ならではの喜びがあったに違いありません。また、製糸場全景を描いた絵馬を笹森稲荷神社と永明稲荷神社（深谷市）に奉納したことからも、直次郎の思いを知ることができます。

明治中期になると、東京官庁街の洋風化（建造物）のために煉瓦の需要が高まり、煉瓦を大量生産できる機械式工場の建設が計画されます。栄一は、良質な粘土が得られるとの理由から、一八八七（明治二十）年、深谷の上敷免村（大寄地区）と新井村（明戸地区）にまたがる場所に煉瓦工場を設立しようと働きかけました。

煙害等を理由に反対する人もいましたが、栄一は、人望のある直次郎ら地元有力者を通して、建設用地の買収を進めます。直次郎は栄一の思いを真摯に受け止めて、原土となる粘土を掘り起こし、畑を水田にできるよさ、工場稼働による地元の利益などを住民に訴えかけました。こうした努力が実り、一八八八（明治二十一）年、ドイツ人技師の指導による煉瓦工場の建設が始まりました。

二〇〇六（平成十八）年、煉瓦工場が閉鎖されるまで、ここ深谷で造られた煉瓦を用いた「近代化に貢献した建造物」を各地で見ることができます。東京駅もその一つで、現在の深谷駅はそれを模して、一九九六（平成八）年に建て替えられています。

野口源三郎

※日本体育教育の発展に貢献した郷土の先人
起き上がりこぼし「野口源三郎」

「野口源三郎遺稿集」より

大里郡八基村字横瀬村に生まれ、後に岡部村の野口家の養子になりました。

一九〇五（明治三十八）年、埼玉県師範学校に入学し、運動会出場種目で一位を占める万能ぶりを発揮しました。

選手として

一九一七（大正六）年、第五回日本陸上選手権棒高跳びで三メートルの日本記録を樹立、一九二〇（大正九）年には第七回オリンピック（アントワープ大会）の選手兼主将として初めての世界の舞台に出場しました。埼玉県初のオリンピック選手となり、十種競技で十二位となりました。

一九二八（昭和三）年の第九回オリンピック（アムステルダム大会）ではヘッドコーチとして参加し、教え子の織田幹雄（おだみきお）が三段跳びの世界記録で優勝しました。

その後、日本陸上連盟から第一号の「功労賞」を受けるなど、日本のスポーツ界の発展、埼玉県体育の振興に力を尽くしました。

体育学者として

野口源三郎は陸上競技や学校体育の向上に尽力し、研究成果を本や論文として即座に発表し選手に還元しました。順天堂大学体育学部がまとめた野口の執筆図書・論文・寄稿等は全二百四十四篇に及びます。

野口は研究成果がまとまるとすぐに書籍や論文として公表し、競技者が利用できるようにしました。特に日本体育協会の機関紙「アスレチックス」で陸上競技の記事を多数担当し、野口が理事を務めた日本体育学会の機関紙「体育の競技」でも多くの論文を掲載しています。著作数が多いだけでなく、その文章表現は「麗筆（れいひつ）」と讃えられ、野口の著書を読んでオリンピックを志した選手も少なくありません。

「野口源三郎遺稿集」より

野口源三郎関係年表（「野口源三郎遺稿集」より）

西暦	和暦	年	野口源三郎関係	主な国内の出来事
1888	明治21年	0	大里郡八基村字横瀬村（現深谷市横瀬）丸橋栄三郎・筆子の長男として生まれる	大日本帝国憲法
1891	明治24年	3	岡部村大字宿根（現深谷市宿根）にある母方の伯父　野口八重郎の養子となる	日清戦争
1895	明治28年	7	岡部尋常高等小学校で4年間学ぶ	日露戦争
1903	明治36年	15	深谷高等小学校を卒業	
			岡部尋常高等小学校代用教員として嘱託勤務	
1905	明治38年	17	埼玉県師範学校入学	
1909	明治42年	21	埼玉県師範学校一部卒業	
			岡部村立尋常高等小学校訓導	
1911	明治44年	23	岡部村立尋常高等小学校を休職。東京高等師範学校文科兼修体操専修科に入学	第一次世界大戦
			オリンピック予選に出場し、代表になれなかったが、マラソンを続ける	
1915	大正4年	27	東京高等師範学校卒業	
			長野県松本女子師範学校教諭兼指導兼松本中学校教諭	
			マーフィーの著書「陸上競技の練習法」がきっかけで棒高跳びや十種競技を開始する	
1917	大正6年	29	第５回日本陸上選手権棒高跳びで3mの日本記録を樹立し優勝	
			第3回極東選手権競技大会に日本代表十種競技に出場優勝	
1918	大正7年	30	東京高等師範学校に教務嘱託で勤務	
1920	大正9年	32	アントワープオリンピックに十種競技選手兼主将として出場。開会式の騎手を務める。（埼玉県初のオリンピック選手）このとき、欧米のスポーツ界を視察して帰国し、世界的視野から高い水準の知識と技能を日本にもたらした。	
1921	大正10年	33	極東選手権大会で日本選手団監督	関東大震災 満州事変 日中戦争 太平洋戦争 ポツダム宣言受諾
1924	大正13年	36	パリオリンピックで日本選手団監督	
1925	大正14年	37	東京高等師範学校の教授に就任	
1945	昭和20年	57	岡部村岡　大野文雄宅で疎開	
1950	昭和25年	62	東京教育大学部長に就任	
1951	昭和26年	63	東京教育大学を定年退職し埼玉大学、順天堂大学の教授を兼任	
1953	昭和28年	65	埼玉大学教育部長となり、埼玉の体育に貢献	国連に加盟
1957	昭和32年	69	埼玉大学退職	
1958	昭和33年	70	野口記念体育賞が制定される	
1960	昭和35年	72	順天堂大学教授　紫綬褒章	
1964	昭和39年	76	渋谷区オリンピック協力会顧問　　叙勲三等賜瑞宝章	
1967	昭和42年	79	永眠	日韓基本条約